白川町立小・中学校再編計画　地区説明会　会議録

１．日　時　　令和４年７月１６日（土）午後７時３０分から午後８時５５分

２．会　場　　黒川ふれあいセンター

３．参加者　　５６名

町教育委員会：鈴村教育長、大岩教育課長、玉置学校再編専門監、鈴村学校教育係長

４．記　録

（１）開会あいさつ　大岩課長

（２）資料説明　　鈴村教育長（19:33～19:55）

（３）質疑・意見等

〇60 代　男性Ａ

・説明いただいた案は未定という理解でよいか。教育委員会としての決定事項であるとすれば何のための説明会か分からない。庁舎移転について、検討委員会を開催し意見を聴いたが、最終的に候補地にも無かった河岐のパチンコ店跡地になったという苦い経験がある。できる限り地域の意見を聴いて欲しい。個人的には、黒川独自の小・中一貫校にして欲しい。

　黒川の地域性として移住者が多いことは特徴であり、現状でも移住希望者は多いと聞いている。少人数教育が受けられることは移住を決めるうえで重要な要素であるので、移住施策という町の活性化とあわせて検証しながら、学校再編の在り方をよく検討して欲しい。

〇鈴村教育長

・最初の質問に関して、教育委員会として決定事項ではなく、提案をしている立場である。ただし、河岐地内に施設一体型の校舎を建設することに関しては決定ではないが、その方向性で進めることを強く考えている。その際に、黒川中学校に関しても同じ校舎に入ることを考えてほしい。中学校に関してはできる限り大人数での教育ができる環境を考えている。一方で小学校に関しては、身近な環境で学習できる旧３中学校単位の白川、黒川、佐見の３地区に学校があるべきと考えている。ご提案いただいた黒川地区における小・中一貫校に関しては参考にさせて頂きたい。

　また、人口減少が進展するなかで、移住との関係性は難しいが、町全体で考えたときにどうするのが良いかと考え、教育委員会として３小１中を基本として提案している。

〇60 代　男性Ｂ

・どうしたら地域を存続できるかということを考えときに中学校がなくなることは地域として寂しく思う。できれば道路環境が改善されるまで待てないだろうか。黒川地区の人口が

減少すれば町全体としても同じ傾向になると思う。義務教育期間のうちは地元に学校を残して欲しい。

〇鈴村教育長
・佐見中学校が今年４月に統合して、佐見地区に中学校が無くなった。地元からは中学生が自転車に乗って通学する姿が無くなって寂しい、という意見は聞いている。
　一方で、白川中学校へ通うことで人数が増え、それまでできなかった種目の部活動などに打ち込むことができ嬉しいという声も聴いている。ちょうど中体連の時期だが、子供同士が切磋琢磨している。佐見中学校の生徒は１７人だったので、やれることが少なくなり、保護者や地元からの要望で統合に至った経緯がある。一番の心配は遠距離からの通学であったが、それ以外の部分は統合して良かったという声を聞いている。学校統合は、地域にとって難しい選択になると思うが、中学校については１つになった方が良いと考え提案をしているところである。

〇40 代　女性Ａ
・統合に関しては、今までも学校等で説明があり「地域の合意なしには進めない」ということを聞いている。今日の参加者も合意をした、という認識は無いと思うが、何をもって地域の合意と考えるのか。

〇鈴村教育長
・佐見の統合時もそうだったが、保護者や地域から統合の意見や要望があり、合意するものと考えている。

〇40 代　女性Ｂ
・正直、今日の説明は統合ありきだと諦めて聞いていた。佐見の場合は以前から子供の人数が少なく、統合に関して一定期間考えてきた経緯があり、今に至ってようやく統合を決心したと思う。黒川の場合は佐見の状況とは違い、統合したいと思っている人は少ないと感じる。誰が統合したい、と言ったのか。私個人として統合はどちらでも良いと思っている。ただ、私がずっと言い続けているのは、統合するのであれば、子供達の交流会や制服の件など教育委員会として統合する方向性や姿勢をもっと早くから示すべきだと思うがどうか。

〇鈴村教育長
・まず、子供同士の交流は現時点でも行っている。中学生の青雲の集い、部活動での練習、小学生では低、中、高学年でそれぞれ交流会を行っているが、統合が目的ではなく、少子化

のなか、少しでも大人数での経験をして欲しい、という思いからである。
黒川地区の皆さんが中学校も統合させない、という意見であれば教育委員会としてはそれを尊重したい。ただ、統合賛成の意見もあると思う。基本的に中学校の統合であり、先ほど言ったように小学校も統合することは良くない、という認識でいる。中学校統合のタイミングは新校舎が完成する令和９年４月を見込み、提案したものである。当然、反対意見が多ければ強行はできないが、新校舎は建設する予定としている。全員の意見が一致することは無いと思うが、最終的にはどうするか決めなくてはならない。繰り返しになるが、教育委員会の提案としては、令和９年４月に黒川中学校も一緒になったらどうかという提案である。

〇70 代　男性Ａ
・正確かどうか分からないが、過疎市町村において１０％が人口増をしている実態がある。それを考えた場合、町全体では人口減だが黒川地区では移住者が増え、子供の数も横ばいで推移するのではないかと思う。自分の子供が黒川の人口の将来予測をした事があったが、その予想よりも現状は良い状況となっている。すぐに子供が増えるとは思えないが、黒川地区の場合は移住希望者が多いので、それも含めて考えたとき、黒川中学校を白川中学校に統合することも少し待った方がいいのではと思う。過疎地域と言いながら人口の動き、流れが変わってきているので、それを考慮していくべきでないか。先ほど意見があったように小中学校共に黒川に残すことを考えてほしい。

〇鈴村教育長
・現在の黒川中学校の生徒は２８名。今後も３０人前後で推移し、多い時には３３人という時がある。今後更に増えるといいな、と切望するが、令和９年４月の統合を考えているので、短い、長いの意見はあるが、教育委員会としては新校舎ができるタイミングで統合するのが良いと考えている。統合を先延ばしすることは不可能ではないが、いつまで伸ばすのか。
教育委員会としても考えたが、いつか？という方法と令和９年４月という方法があり、提案としては新校舎ができるタイミングとしている。そうでなければ、いつという説明はできなくなる。平行線の話になるが、令和９年４月と考えた理由は以上のとおりである。

〇40 代　女性Ｃ
・以前の説明会は、保育園や小中学校単位でこうした説明の機会があった。実際に子育てをしている年代の声を聞こうと思うと小さな単位での機会があっても良いと考える。そういう意味で今日はお母さんたちの参加が少ないと感じているし、佐見地区の保護者、地域の皆さんの具体的な声が聴けると良いと思う。私自身は統合により大人数で学ぶ機会の良さも理解しているが、課題となるのは遠距離通学だけでなく、学力の問題、いじめ問題もあると

思う。何事も経験だといえばそうかもしれないが、通学だけが課題ではないと思う。以前も話したが、黒川地区は地域に密着した学びの機会が充実しており、その結果、歌舞伎役者を目指したり、親の職業を継ぐなど、黒川の文化を大切に思い、高校卒業後も地元に戻ってくるという環境ができていることは強みになっている。これが白川中学校になった時にどうなのかなと感じる。町全体で考えたときにちょうど真ん中、負担感を考えれば白川地区が中心かもしれないが、十年先を考えたときに白川町が存続するのか、それが義務教育学校という形で良いのか、疑問に思う。子供達は親が考えるより柔軟な対応はすると思うが、不安を感じる子育て世代がどんどん町外へ出て行くのではと感じてしまう。

〇鈴村教育長

・昨年は保護者を対象に説明の機会を持ち、その後に様々なご意見いただいた。公表を前提にしなかったが、色々な意見があったと認識している。今日だけで説明会を終わるつもりはなく、もう一度こうした形式で３０日に予定している。その後についても、子育て世代への説明などは積極的に行い、どんな意見が中心なのかを把握していきたい。色々な意見があることを把握しているので、あまり急いではいけないと思う。

～今年の少年の主張発表（白川中：熊崎さんの発表）について紹介あり～

　地域と学校の関わりについては、存続、統合どちらにしても大切にする必要があると思っている。黒川中学校で私自身もお世話になったが、歌舞伎、和太鼓、三味線などは素晴らしい黒川の伝統文化である。先ほど説明した新しい学校づくり検討委員会において協議する内容で、白川中学校と佐見中学校の統合の際にも同じように検討をしてきた。

　修学旅行の行き先など統合する前に考えることや、学校でできないことは地域の力をお借りするコミュニティスクールや地域学校協働活動など、存続、統合に関わらず大事にすべきことだと考えている。黒川は私の想いとしてワクワクできる地域であり、伝統や文化は黒川地区だけでなく、町全体の財産として教育課程に取り入れながら地域と共に進めていく、新たなものを創っていくという考え方で進めていきたい。

〇60 代　女性Ａ

・佐見地区の統合についての情報として皆さんにお話ししたい。佐見地区では今の２７歳の子が２人という時があった。その時に佐見の将来を考える会が発足した。今、保育園は５人。子供がゼロの年や１人学級も存在している。その保護者さんは子供を白川小学校に通わせたいという想いがある。将来を考える会において、保護者や地域のアンケートを取った結果、保護者の意見に任せるということで、中学校に関しては、やれることも少なく、黒川地区の半分の規模であったため、統合という形となった。その際には、方向性を決めるための情報収集が大切だと感じた。佐見でも以前に義務教育学校の検討があり、白川郷学園を視察した

こともあったが、結局、佐見単独の小中一貫校構想は無くなった。先ほど意見のあった黒川の小中一貫校という考えも十分考慮すべき提案だと思う。そして、統合しないと校舎建設の補助金が出ないという町の事情があるのではないかと思う。

〇鈴村教育長

・補足と訂正をする。教育委員会が出している方針は、いきなり義務教育学校とは一度も説明していない。まずは３小１中を目指すという部分は変えていない。その先に義務教育学校を視野に入れるということ。変わった点は、校舎建設の時期を令和８年３月完成を目指すとしてきたが、諸事情により令和９年４月に学校統合、そして校舎は令和１０年３月までに完成するという点である。

　統合すると補助があるという点も、そんな簡単なことでは無いことが分かっている。今回の構想の場合、新校舎建設に関する国の補助は、小学校分のみであり、補助金のために黒川中学校を統合する、ということは一切ない。財政力豊かな町では無いが、築５９年を経過した校舎をこのまま使用することも非常に難しい問題であり、手持ち財源は少ないが、将来の子供たちのために小中一体型校舎の整備を考えているものである。

〇40 代　男性Ａ

・義務教育学校の事だが、その場合は町内の小、中学校が全て一緒になるのか。

〇鈴村教育長

・今考えている案としては、１つのモデルとして、河岐に施設一体型の小中学校があり、黒川と佐見にそれぞれ小学校があるが、全てまとめて１つの義務教育学校とする案である。義務教育学校は１年生から９年生までの教育課程であり、あまりにも長いので、どこかで区切りを入れることになるが、それは自治体で決めることが出来る。モデルとして４年生までは地元、５年生からは本校に通う形を想定している。６・３年の区切りであれば、あえて義務教育学校にする必要は無い。１０歳の成長期にあわせた子供の発達を考慮した考え方であるが、一番の課題は子供の数であり、どれくらいになるか見極める必要があるし、先生の力もかなり必要である。先生の力がつけば子供の力も必ずつく。まずは、３小１中の体制をつくることが前提であるが、義務教育学校とした場合、その効果は必ずあると考えている。

　他に意見が無かったので、教育長がお礼の挨拶をした。

・意見の多くとして、黒川地区に学校があってほしいということを確認したと同時に、教育委員会としての提案についてもご理解頂くことをお願いした。

（４）閉会あいさつ　大岩課長　（２０：５５閉会）